

【分析資料】 出産退職の減少とその意味

1. はじめに

これまでの日本の女性のライフコースに見られる特徴として、第1子出生後の出産退職の多さが指摘されてきた。国立社会保障人口問題研究所の出生動向基本調査では第1子出生後の女性の継続就労率を毎回公表しているが、かつては25%から30%ほどであり、変化は乏しいとされていた。しかしながら2021年9月に発表された第16回出生動向基本調査の結果からは、2015～19年の間に第1子を出産した女性の53.8%がその後も就労を継続しており、正規職の女性の68.3%が就労を継続しているという。

実は他の社会では出産退職に関する注目は必ずしも高いとはいえない。アメリカをはじめとする他の社会でも女性の出産退職は決して少ないわけではないが、復職や再就職が日本よりも容易であるためにそれほど注目が集まらないのではないかと、と思われる。日本は新卒一括採用および終身雇用制といった雇用上の特徴ゆえに出産退職後の復職や再就職が他の社会よりも簡単ではなく、他の社会以上に出産退職がキャリア上の損失を伴うものと目されてきたようだ。

今回のデータにおいても未就学児を抱えた女性の就労率は高い。以下ではこのことがどのような意味をもつか、どのような変化を今後引き起こすのかを考察する。

2. ライフステージ別に見た女性の就労率

末子の年齢によってライフステージを末子0-2歳、3-6歳、小学生、13-19歳に区分し、有配偶女性の就業状態を正規職、非正規・自営、無職の3つに区分したところ、図1のような結果となった。

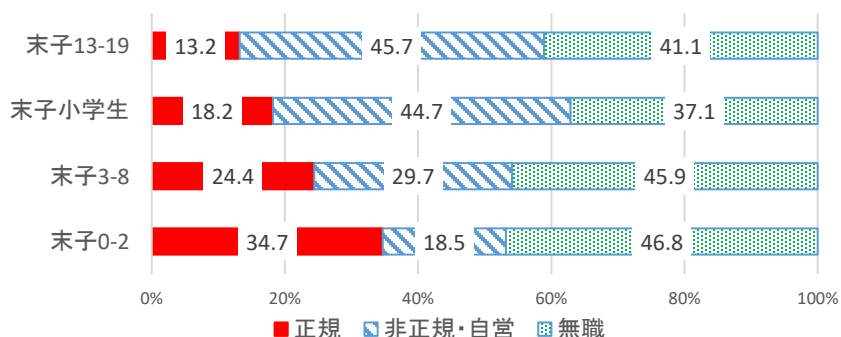


図1 末子年齢別にみた有配偶女性の就業状況(n=2,338)

一番仕事と育児の両立が難しいと想定される末子0-2歳についてみると、34.7%が正規職就業、無職者は半数を下回っている。しかし末子年齢が上がるにつれ、正規職就業者の比率は低下し、非正規・自営(自営は少ないため主成分は非正規)が半数近くに達するようになる。正規職就労率が末子年齢の上昇にともないその後低下していくことからすると、若い世代ほど出産退職が減少し継続就労が増加していると考えられそう(後述のようにテレワークの経験率はそれほど高くはなく、コロナ下での一時的な現象とは考えにくい)。

ついで有配偶女性の学歴を短大・高専卒以上(大卒)と高卒以下(非大卒)に区分して正規職就労者の比率を比較したのが図2である。

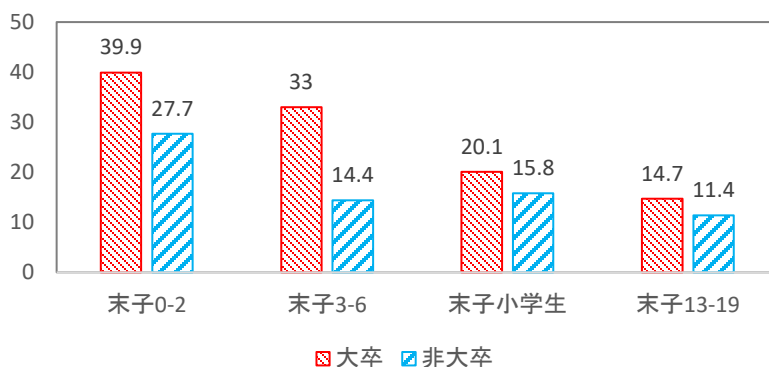


図2 有配偶女性の学歴別・ライフステージ別にみた正規職就労率(n=2,388)

図2から、女性の正規職就労率は大卒で高く、非大卒ではそれより低く、また末子が未就学の時期にその差が大きいことが理解できる。末子0-2歳という乳幼児を抱えた時期でも、大卒女性の4割が正規職で就労をしている。出産退職をせずに継続就労をする傾向は大卒女性に顕著な方向になってきているようだ。これに比較すると末子が小学生以上では正規職就労者の比率は低く、従来指摘されてきたような水準に近い。今後、現在の末子0-2歳に見られるパターンがそのまま継続するのか、いわゆる「小1の壁」のようにその後正規職就労率が低下するのかは注目すべき事象である。

3. 正規職共働きの増加と世帯所得格差の増大

結婚は学歴同類婚ないし女性にとっての学歴上昇婚の形をとることが知られている。このことは大卒の女性は大卒以上の男性と結婚する傾向が見られることを意味する。とすれば、大卒女性の出産後の正規職の継続就労率の増加は、大卒の正規職共働き夫婦の増加をもたらすと予測できる。男性は子の出生後もほとんどの者が正規職就労を継続する。従来は大卒の女性でも出産退職することが多かったが、そうでなくなることは高所得の共働き世帯が増加することを予想させる。この点を検討してみよう。有配偶女性の学歴を大卒・非大卒に区分し、末子年齢別に就業形態別の世帯年収を比較してみた(図3)。

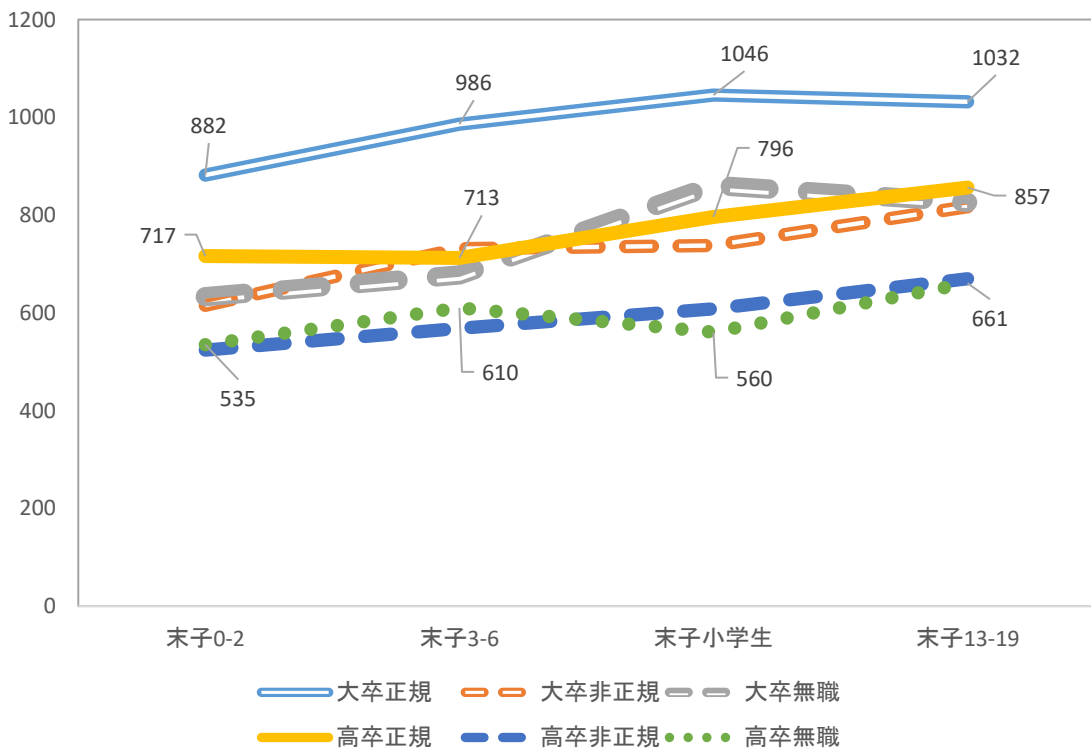


図3 ライフステージ別にみた有配偶女性の学歴別・就労形態別世帯年収の平均値
(単位:万円, n=1,883)

まず傑出して世帯所得が高いのは予想通り大卒正規職女性の世帯であり、末子小学生・中学生以上では世帯所得の平均値が1000万円を超えている。ついで高卒正規職、大卒非正規職、大卒無職などの世帯が比較的近い所得額でまとまっており、最後に高卒非正規職、高卒無職がひとつのまとまりを示している。大卒正規職世帯と他世帯の所得格差が大きくなるのは末子小学生の時期で、高卒無職世帯と比較すると倍近い差異が見られる。皮肉なことだが女性の出産後の継続就労が高まったことでとくに大卒の共働き世帯に高所得世帯が多くなり、従来よりも所得格差が大きくなっていることが推察できる。このことが子どもの生活や教育環境にどのような差異を生み出しているのか、今後精査していく必要があるだろう。

4. 未就学児をもつ有配偶有職女性およびその世帯の特徴

それでは、こうして増加してきた「子どもが未就学の時期(末子0-6歳)に正規就労している」有配偶女性の労働環境にはどのような特徴があるのだろうか。まず、勤務形態を正規職・非正規職別に図4に示す。

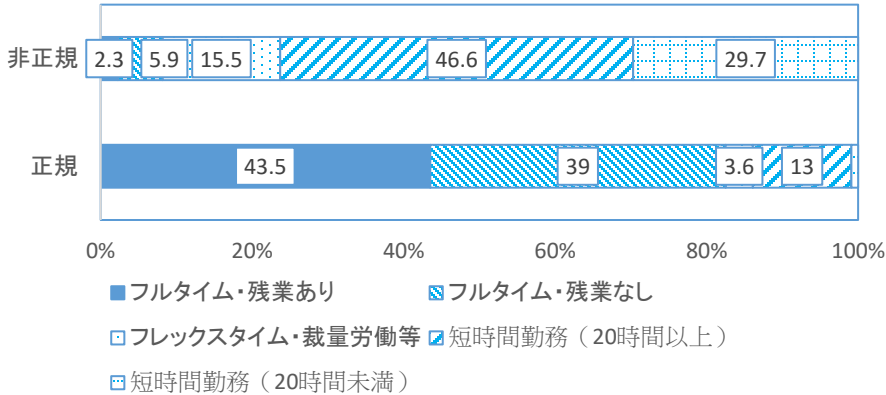


図4 未就学児をもつ有配偶女性の勤務形態(n=550)

図4からわかるように、正規職は「フルタイム残業あり」が43.5%と家庭との両立が簡単ではない世帯がかなりの比重を示している。「フレックスタイム・裁量労働等」は4%にも達していない。これに対して非正規は短時間勤務が75%以上とほぼ真逆の構造になっている。

テレワークの普及が家庭との両立を可能にしている可能性を検討してみたが、正規雇用者331名のうち調査時点においてテレワークをしていないものが75%、週1日以上は16%に過ぎない。ちなみに、非正規雇用では92%がテレワークをしていない。これらの数値からすると、テレワークの普及が女性のワークライフバランスを高め、出産退職を減らしたとは考えにくい。

正規職就労者に「正社員で働く理由」を尋ねた結果では「十分な収入を得るため」67.4%、「雇用の安定性を重視」50.5%あたりが主要な意見であり、「社会的信用を得たい」「やりたい仕事をしたい」などの仕事のやりがい重視する回答はいずれも2割を下回っていた。また「家事・育児と両立しやすいため」は22.7%であった。この結果からすれば職場が家庭と両立しやすいので出産退職が減っている、とも考えにくい。

また、仕事や働くことに関する現在の考え方を尋ねたところ、「雇用の安定を重視」は92.7%が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答し、「給与を重視」が84.9%と同様の傾向が続く。また「ワークライフバランスを重視」が88.8%と家庭との両立が大きな関心事項になっていることがわかる。基本的には大卒女性を中心に「働いて所得を得ること」への動機づけが強くなっており、このことが出産退職を減らした一因となっているように思われる。

5. 未就学児をもつ有配偶有職女性の世帯の家事・育児の特徴

つぎに同じ末子0-6歳の有配偶有職女性の世帯について、家事・育児などの様子を検討してみよう。まず女性本人の育休取得経験は89.7%であるが、その夫の育休取得経験も19.3%と(これまでの日本の水準から考えれば)高く、まだまだ取得率に差はあるものの家事・育児の平等化が進展していることがうかがえる。

食事・料理の外部サービスの利用については、「市販のおかず購入」「料理代行」「フードデリバリー・出前利用」「ネットスーパー・食材宅配サービス利用」のいずれかの利用経験の有無について集計したところ、図5のような結果となった。

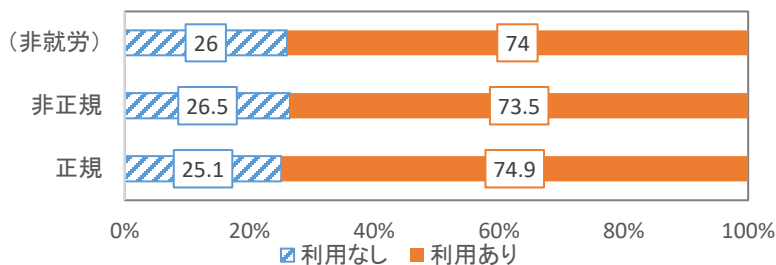


図5 未就学児をもつ有配偶女性の食事・料理の外部サービスの利用状況(n=1,039)

図5では比較のために非就労(専業主婦)の利用状況も示してあるが、意外なことに正規職就労者とそれ以外の間にそれほど大きな差異は見られない。正規職就労者でこうしたサービスを利用したことがないものが4分の1ほど存在することはやや驚きだが、親(子にとっての祖父母)と同居し、家事を任せているケースがあるのかもしれない。

時短家電(ロボット掃除機、調理鍋)などの利用経験は全般的に低かったが正規職では30.8%、非正規職では23.3%が利用経験ありと回答している(非就労は20.9%)。ハウスクリーニングの利用(部分[エアコンなど]・全体)も総じて利用率は低く、正規職で11.2%、非正規職で5.5%、非就労で5.1%という結果であった。子どもの送迎の外部委託、キッズ・ベビーシッターの利用といった育児サービスの利用経験についても利用率は低く、正規職で13.3%、非正規で10%、非就労で7.8%という結果であった。

時短家電・ハウスクリーニング・育児サービスいずれも正規職とそれ以外の間に利用率に関する統計的な有意差が示されたものの、全般的に利用率は低く、これらの利用が就労継続を可能にしているとみなすことは難しい。

もう一つ考えらえるのは親族による家事・育児支援である。ここで末子年齢別に本人・配偶者の親との同居率を女性の就業形態別に比較してみよう。

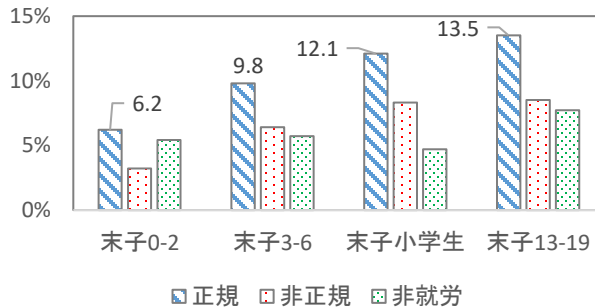


図6 末子年齢別・有配偶女性の就労状況別に見た親との同居率(n=2,255)

妻の親・夫の親との同居はいずれも少ないが、やや妻の親との同居のほうが多い傾向がみられる。図6は妻方・夫方を問わず少なくとも1名以上の親と同居している比率を示しているが、全般的には同居率はそれほど高くはない。末子の年齢段階があがるにつれて親との同居率は高くなる傾向がみられ、とくに正規職ではこの傾向が顕著である。とはいうものの、末子が未就学の場合の親との同居率は6%程度に過ぎず、同居の親に家事や育児を依存しているというわけでもないようだ。これは、かつては未就学の子どもの抱えている状態での就労は親族の利用可能性に大きく規定されていたのに対して、現在はそうした状況が改善され、親族の利用可能性が低い人たちも就労するようになったということなのかもしれない。そこで最後に夫の協力について検討してみたい。

有配偶女性に夫の家事・育児への関わりを直接測定している項目はないため、配偶者の家事への満足度の平均値をライフステージ別・(女性の)就労状況別に図7に示す。

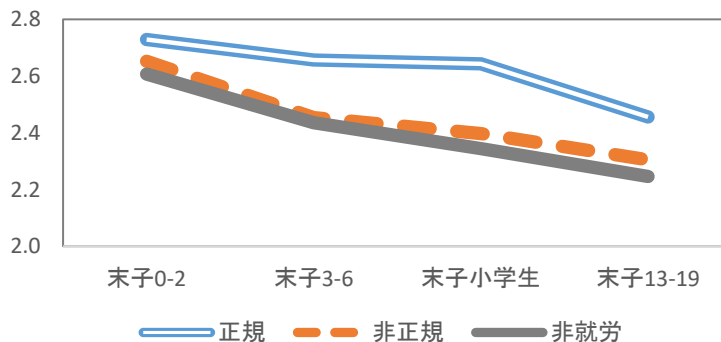


図7 末子年齢別・有配偶女性の就労状況別に見た夫の家事への満足度(n=2,215)

図7の満足度は得点が高いほど満足していることを意味し、1(全く満足していない)から4点(とても満足)の4段階で測定されている。図7では末子0-2歳で満足度が高く、その後満足度が低下しているように映るが、ライフステージ間に有意差は見られず、就労状態のみが有意な効果を示し、正規職就労者の場合に夫の家事についての満足度は高い。ただし末子0-2歳に限れば就労状態の違いによる差異は少なく、この時期には全般的に夫の関わりが大きいようだ。育児について末子未就学の時期のみに限定し、同様に妻の就労状態別に夫の育児への満足度の平均値を示したのが図8である。

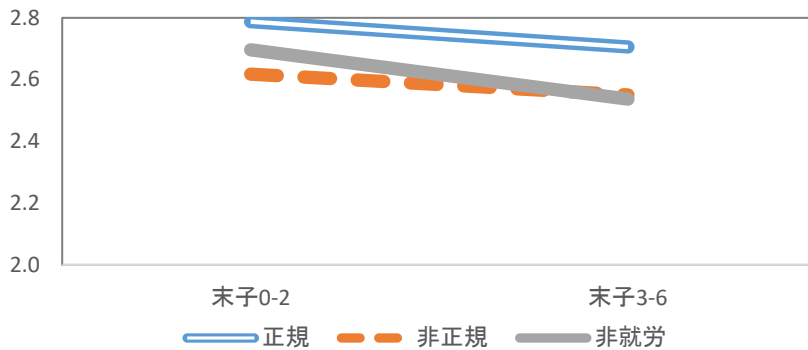


図8 未就学児をもつ有配偶女性の就労状況別に見た夫の育児への満足度 (n=950)

図8の育児もほぼ図7の家事と同様のパターンを示し、妻正規職の場合に夫の育児に対する満足度は有意に高い。以上からすると、とくに妻が正規職の場合に夫の家事・育児参加が高いことが推察される。これを確認するために有配偶男性を抽出し、妻の就労状況別・ライフステージ別に夫回答による仕事のある日の夫の家事・育児時間の平均値を示したものが図9である。

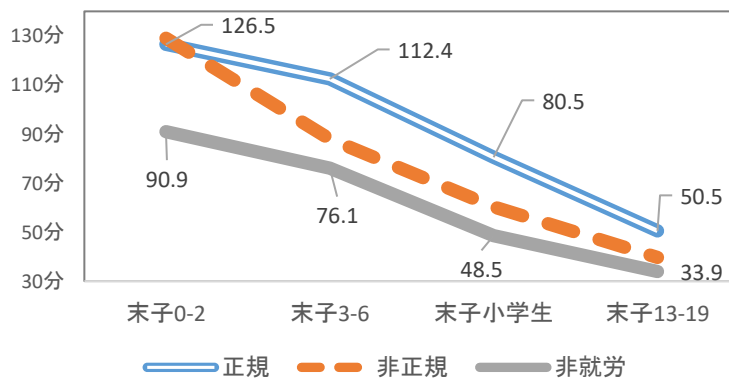


図9 末子年齢別・妻の就労状況別に見た夫の家事・育児時間 (仕事がある日, 夫回答: n=2,412)

図9では末子0-2歳の家事・育児時間の平均値が高く、ライフステージに沿って数値は低下していく。また妻正規職就労者の家事・育児時間は末子0-2歳では妻非正規就労の場合とほとんど差異はないが、それを除けば基本的には高い。では妻の家事・育児時間と比較して夫の家事・育児参加はどの程度のものなのだろうか。

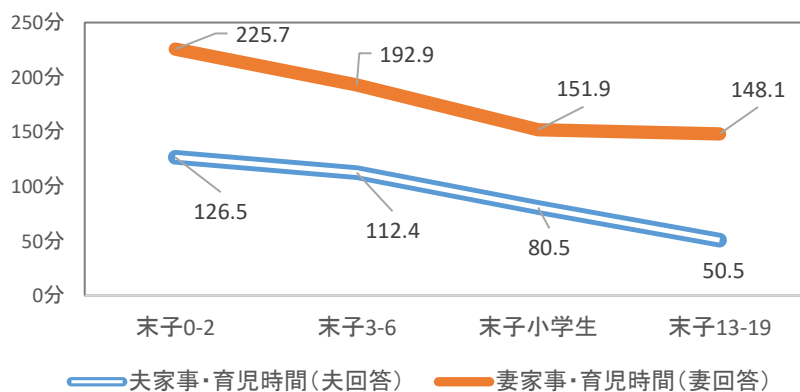


図10 末子年齢別にみた妻正規就労者の妻・夫の家事・育児時間の平均値 (仕事がある日, n=1,462)

図10は妻正規職の有配偶男性および有配偶女性を抽出し、仕事のある日の夫の家事・育児時間(夫回答)と妻の家事時間(妻回答)を比較したものである(同一世帯内での比較ではないことに注意)。妻が正規職就労をしている場合、夫の家事時間は非正規や非就労の妻の夫よりも長い、それでも妻の家事時間に比較するとかなり低く、不完全な指標ではあるが夫と妻の家事・育児時間の平均値の合計に占める夫の家事・育児時間の比率を算出すると、末子0-2歳で35.9%、末子3-6歳で36.8%、末子小学生で34.6%、末子13-19歳で25.4%と、夫の担当は全体の3割強というところであり、家事・育児の主要な部分は依然として女性が担っていることがわかる。

以上の結果の評価は議論の分かれるところではあるが、正規職共働きでも3割しか男性が担当していない、ということもできるし、3割くらい担当するようになったという言い方もできるように思える。なお、末子未就学の時期について、夫の家事および育児に対する正規職の妻の満足度は妻の学歴による差異は示されなかった。この分析だけからは結論は出せないが、未就学児をかかえて正規職に就労する大卒の妻の夫が特に協力的である、というわけではないようだ。

6. 結論

出産退職をせずに正規就労を継続する有配偶女性が増加し、特に大卒女性にそうした傾向が高まっているようだ。こうした人々は夫婦で正規就労をしているために世帯年収が高く、それ以外の世帯との所得格差は大きくなっている。

またこうした正規雇用を継続する有配偶女性は必ずしも家事・育児と両立しやすい労働環境にあるわけでもなく、親族資源に恵まれているというわけでもない。基本的には妻が主要な部分を担当しながら、夫が一部を分担する形で家事や育児に対応しているようだ。この点でやはりこうした世帯を支える重要な存在は夫であるように思われる。妻に比較するとまだまだ家事・育児の分担率は少ないとはいえ、従来よりは育児休業の取得率や家事・育児の分担率は増加している。今後、これらの人々に性別平等型の夫婦関係がより広く示されていくように思われる。

研究協力者：夏天(慶應義塾大学大学院)・王婷(慶應義塾大学大学院)